
帰らぬ子供たち

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰らぬ子供たち

【NZコード】

N3101D

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

僕は踏切の手前で、確かに幼児一人が消えていくのを見た。それは見間違いではなく、確かに事実だった。友人の昭仁はそんな僕の訴えを一蹴するが……。

「俺、確かに見たんだ」

「何を？」

「あそこにある踏切の手前で、小さい子供一人が消えてくのをだよ」「消える？見間違えなんじゃねえの？」

「いや、見間違えなんかじゃない。間違いなく子供が消えた。しかも二人だよ」

僕がそう言うと、目の前にいる友達の昭仁^{あきひと}が首を傾げる。

「どんな子だった？」

「一人とも頭が角刈りだったな。年齢は、そつだね……五、六歳ぐらいいってここだったよ」

「そつ……」

昭仁が語尾にいやな類の含みを残しながら返す。

「お前ホントは何か知つてて、俺に隠してるんじゃねえか？」

僕が強い口調でそう言つて昭仁を問いただすと、昭仁が、

「いいか。これから俺が言うこと、冷静に聞けよ」

と言い、ゴホンと軽く一つ咳払いして、話し始めた。

「実はな、二年前にあの踏切で人身事故が起こったんだ。被害者は幼い子供一人だった。親が田を離した隙に、たまたま電車が通る直前の踏切の真ん中にいて、やつてきた電車に跳ね飛ばされてな」

「ふーん」

僕がゆっくりと頷くと、昭仁が続けて、

「人身事故で、その日のその時間帯以降の電車は完全に止まっちゃつたんだ。そして子供たち一人の遺族は多額の賠償金を支払わされ、子供たちの父親があまりのショックに自宅の部屋で首吊つて自殺した。おまけに母親は実家に帰つちまって、一家は完全に離散したんだ

と言い、軽く息をついた。

十一月末ですっかり冬のせいか、辺りは冷え込んでいた。僕も昭仁も、自販機で買っていた缶コーヒーで両手を温めながら、ハアハアと繰り返し息を吐き出す。吐く息は付近に漂う冷気に混じって、真っ白に染まっていた。

「そんな日くがあつたのか？」

僕がそう問うと、昭仁が、

「ああ。だから、未だに心ある人たちが踏切の手前に花や子供たちが好きだった飲み物なんかを飾つてるよ。見れば分かるだろ？」「いま

と言い、踏切の手前を指差した。

昭仁が指差した先には確かに、買つてこられたばかりのような花や、開けられていないジュースの缶などが所狭しと置かれている。僕が、

「俺、ちゃんと手を合わせてくるよ」

と言い、踏切まで歩いていって、そこで手を合わせた。

すると不意に辺りの空気が、燃やした線香のような、鼻腔を強く刺激する臭気へと変わる。

そして目の前には踏切事故で死んだ子供たち一人の姿が現れた。一見するまでもなく、腰から下がない靈だった。

「お兄ちゃん、おいでおいで」

子供たち一人が頻りに手を振つてくる。僕はそれに釣られて、踏切の方へと歩いていった。
カンカンカンカン……。

遮断機が降り始め、夢遊病状態のよつた僕が電車の通る踏切内へと誘い込まれる。

僕が不意に自分の右側を見ると、猛烈な勢いで電車が走ってきていた。

“…………！？”

何も考える暇がないまま、僕は電車に跳ねられた。

バーン。

強烈な音が辺りに鳴り響く。

人身事故とあつてか、付近一帯が騒がしくなり始めた。その様子を遠くから昭仁がじつと見つめている。

不謹慎にも昭仁は笑っていた。

“ああ、あいつもこの踏切にまつわる都市伝説通りにイッたな”昭仁は僕に対し、ある一つ隠し事をしていた。それは、踏切での幼児一人の人身事故を話すと、その人間がまるで吸い込まれるようにして踏切内へと入つていき、そこでやつてきた電車に跳ね飛ばされるという事実だった。昭仁はその秘密を僕に喋らずに、幼児の死亡事故だけを話した。だから、僕が犠牲になつたわけだ。

近くの派出所にいた警官を始め、複数の警察官が出動し、跳ねられて血みどろと化した僕の遺体や現場での詳しい様子を検証している。昭仁は遠巻きにその様子を見つめながら、黙つていた。

昭仁が、

「……寒い」

と呴き、騒がしい踏切から離れ、近くにあるバスター・ミナルに入ろうとした瞬間、ある惨劇が巻き起こつた。

昭仁は右肩に冷たいものを感じた。温もりのない不気味な類の感触だ。

昭仁がふつと振り返ると、そこには幼児一人に加え、つい今さっき跳ね飛ばされた僕が立つっていた。

「どうした？」

昭仁が恐る恐るそう訊ねると、僕の靈が、

「お前には死んでもう」

と言い、ゆっくりと昭仁に近付いていく。

「や、止めてくれよ」

昭仁が後ずさると、僕の靈に加えて幼児一人の靈も、

「僕たちを笑い者にしたのはあんただ」

と言つて、ゆっくりと昭仁に擦り寄る。

昭仁はどんどん後ずさり、やがて踏切から百メートルぐらい離れた場所にまで来た。

そして次の瞬間、派手な音を鳴らして走っていたオートバイが、昭仁を思いつきり跳ね飛ばした。

「あー……」

昭仁の悲鳴が辺りに木靈こだまし、昭仁は固いアスファルトに叩き付けられ、即死した。

こうして幼児一人に加え、僕と昭仁が立て続けに死亡した。

それから先、幼児たちと僕が犠牲になつた踏切や、昭仁がバイクに跳ねられた場所に花や線香が供えられるようになり、僕たちの事故死も都市伝説となつた。

やがてその踏切や昭仁が跳ねられた道路にも新たな日ぐが付く。そこは幼児二人に加え、僕たち一人、合計四人の人間の尊い命が犠牲になつた場所だと。

今日もその踏切は、何でもないようになんかんかんと音を鳴らして、遮断機を上げ下げしている。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3101d/>

帰らぬ子供たち

2010年10月8日15時33分発行